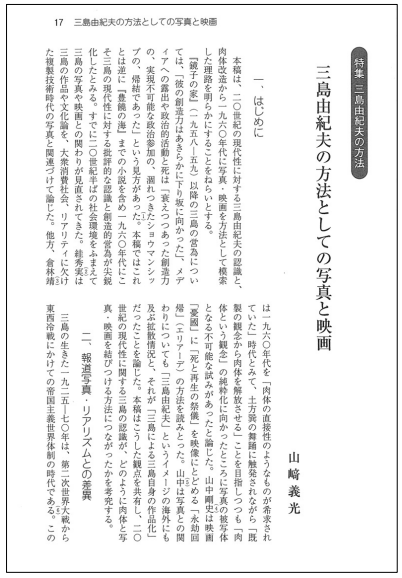
20世紀の日本文学についての研究

キーワード[小説，ジャンル，近現代文化史，表象，思想]

教授　山﨑　義光


17　三島由紀夫の方法としての写真と映画

特集　三島由紀夫の方法

三島由紀夫の方法としての写真と映画

山﨑義光

一、はじめに

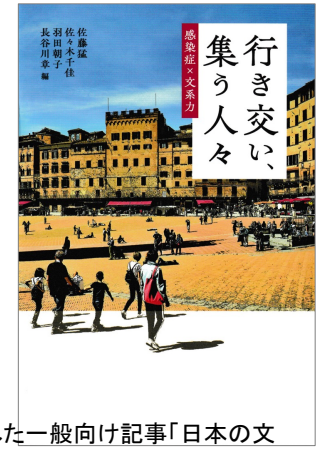
本稿は、二〇世紀の現代性に対する三島由紀夫の認識と、肉体改造から一九六〇年代に写真、映画を方法として模索した理路を明らかにすることを目的とする。

『鏡子の家』（一九五八・五九）以降の三島の営為については、「彼の創造力はあきらかに行き詰まりに向かった」、「メディアへの露出や政治的活動の、混れつきたショウマンシップの、帰結であった」という見方があった。本稿ではこれとは逆に『豊饒の海』までの小説を含め一九六〇年代にこそ三島の現代性に対する批評的な認識と創造的営為が共鍛化したとみる。すでに二〇世紀半ばの社会環境をふまえて三島の写真や映画との関わりが見直されてきた。佐藤秀明は三島の作品や文化論を、大衆消費社会、リアリティに欠けた複製技術時代の写真と関連づけて論じた。他方、倉林靖は一九六〇年代を「肉体の直接性のようなものが希求されていた」時代とみて、土方巽の舞踊に触発されながら「既製の観念から肉体を解放させる」ことを目指しつつも「肉体という観念」の純粋化に向かったところに写真の限界となる可能性があったと論じた。山中剛史は映画「憂国」に「死と再生の祭儀」を映像にとどめる「永劫回帰」（エリアーデ）の方法を読みとった。山中は写真との関わりについても「三島由紀夫」というイメージの海外にも及ぶ拡散情況に、それが「三島による三島自身の作品化」だったことを論じた。本稿はこうした観点を共有し、二〇世紀の現代性に関する三島の認識が、どのように肉体と写真・映画を結びつける方法につながったかを究明する。

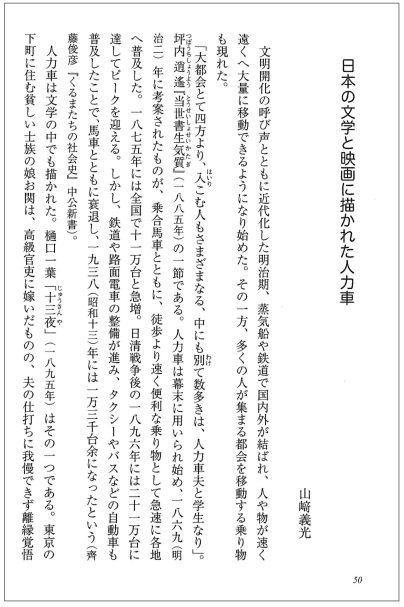
二、「報道写真・リアリズム」との差異

三島の生きた一九二五―七〇年は、第二次世界大戦から東西冷戦にかけての帝国主義世界体制の時代である。この

三島由紀夫の創作手法を写真・映画との関わりから考究しました。



新聞掲載した一般向け記事「日本の文学と映画に描かれた人力車」他が収録された共著が出版されました。


日本の文学と映画に描かれた人力車

山﨑義光

文明開化の呼び声とともに近代化した明治期、蒸気船や鉄道で国内外が結ばれ、人や物が速く遠くへ大量に移動できるようになり始めた。その一方、多くの人が集まる都会を移動する乗り物も現れた。

「大都会として四方より、入こむ人もさまざまなる、中にも別て数多きは、人力車夫と学生なり」。坪内逍遙「当世書生気質」（一八八五年）の一節である。人力車は幕末に用いられ始め、一八六九（明治二）年に考案されたものが、乗合馬車とともに、徒歩より速く便利な乗り物として急速に各地へ普及した。一八七五年には全国で十一万台と急増。日清戦争後の一八九六年には二十一万台に達してピークを迎える。しかし、鉄道や路面電車の整備が進み、タクシーやバスなどの自動車も普及したことで、馬車とともに衰退し、一九三八（昭和十三）年には一万三千台余になったという（齊藤俊彦「くるまたちの社会史」中公新書）。

人力車は文学の中でも描かれた。樋口一葉「十三夜」（一八九五年）はその一つである。東京の下町に住む貧しい士族の娘お関は、高級官吏に嫁いだものの、夫の仕打ちに我慢できず離縁覚悟

50

内容：

20世紀日本の文学を対象に、近現代の文化史的視野から、その特質や価値は何かについて研究しています。

20世紀は、地球的な規模で、人・物・カネ・知識が流通し交流・闘争するようになった時代です。政治や経済はもちろん、さまざまな文化がグローバルに伝わるとともに、伝わった先で変容しながら新たな文化を生み出すようになりました。

日本では「西洋化」としての「近代化」が進められ、文学も旧来の古典や戯作以上に西洋の小説や詩、文学に対する評価基準が受容されて近代文学が産み出されてきました。「小説」ジャンルを中心に、現在進行中の社会の話題をリアルに生き生きと描き出す、他方では憧憬や幻想を孕んだ空想世界を描き出すなど、雑駁多様な作品が創作されるようになりました。新聞・雑誌・書籍といったメディアが拡大するとともに「文学」の受容層も大衆化しました。こうした近現代社会のなかで、どのような「文学」が、どのように書かれてきたか。20世紀日本の社会的歴史的な背景をふまえて「文学」という文化現象のもった特質や価値について研究しています。

アピールポイント：

グローバルな文化史的動向との関わりで、メディアや交通、写真や映画などとの関連も視野に研究しています。

分　野：文学
専　門：日本近代文学

E-mail：yyamazaki [at] e.yamagata-u.ac.jp
Tel　：023-628-4328